

動画を活用した土器づくりの体験講座について

鶴見 諒平

要 旨

2021・2022年度に福島県文化財センター白河館が実施した、非接触型の体験(実技)講座の試みについて紹介する。講座内容は、あらかじめ当館が準備した「土器づくり」の動画を受講者がインターネットで視聴し、当館が用意した粘土等を用いて、自宅等で製作するというものであった。2カ年の非接触型体験講座の内容を総括し、今後の課題について述べる。

キーワード

体験活動 土器づくり 動画 インターネット

1 はじめに

福島県文化財センター白河館は、文化財に関する関心を高めるため教育普及を活動の柱としている。その一環として、開館以来、様々な体験学習を実施してきた。当館が実施する体験学習には、①火おこしや勾玉づくりといった来館者が常時館内で行うことができるもの、②実技講座や実験講座とよばれる期日や参加人数を設定して行う募集型のもの、③「おでかけまほろん」と題して小学校や公民館などの館外施設で行うものがある。

しかし2020年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策が求められる状況にいたって、これら体験学習も大きな変更を余儀なくされた。このことについては、2020年度発行の『福島県文化財センター白河館研究紀要第19号』に詳細がまとめられている(笠井ほか2021)。

その中で、来館せずに自宅などで実技講座を受講可能かどうかの検討を始めた。そこで館外での受講に対応する形として、インターネット(YouTube)動画配信を活用した在宅型の実技講座を始めることとした。小論は、2021・2022年度に実施した土器づくりに関するこれらの実技講座の内容を整理し、報告するものである。

2 2021年度

(1) 実施内容

2021年度は、土器づくりに関する3つの実技講座を計画し、それぞれで対象者や目的などに違いをもたせた(表1)。

2021年度に新たに始めた取組として、在宅型の

実技講座「おうちで土器づくり」がある。この実技講座は、長年にわたって当館が実施してきた「土器づくり初級編」をベースに、動画を見て、自宅などでも簡単に土器づくりができないかと企画したものである。

従来の「土器づくり初級編」では、受講者は実在する土器を手本に製作する。それを通じて、土器づくりの技法を理解して習得することが目的となる。受講者は輪積み法による粘土の積み上げや文様の施文の方法を学んでいく。また、「初級編」はその主な対象を初めて土器づくりをする人として実施している。そのため、当館が実施する土器づくり体験の



まほろん Web配信実技講座

おうちでできる **土器** づくり

講文時代と同じく作り方で土器をつくろう!
動画を見てつくり方をまねしてみよう

土器づくりをやってみよう
【開催日】土曜15時から16時30分
【実行期間】令和5年2月20日(土)
—令和5年2月24日(土)の開催期間内
【実行場所】まほろんショップ
【条件】3歳未満(申込・作品持ち・印刷)が可能な方、YouTubeでの動画視聴(講師の自己撮影)が可能な方。

できあがった土器はまほろんに持って来てね
つくった土器はまほろんで焼き上げます。
土器は土曜日に発送して、2つ以上の数量は送料が無料です。
数量限定が終わりからまほろんにご連絡ください。
【講師受付期間】令和5年2月24日(土)
—令和5年2月20日(土)の開催期間内

土器が焼けてから取りに来てね
土器の焼きあがりから引渡しします。
まほろんまでお運してくださいます。

★予約や申込受付までのご連絡もお受けしています。
ネットを準備しますまでのご連絡はご遠慮ください。

福島県文化財センター白河館・まほろん
〒971-0404 福島県白河市白河1-1-1 1F 10号館
TEL 0248-21-0700 FAX 0248-21-1075 まほろん 検索

第1図 講座の募集チラシ(2022年度)

表1 2021・2022年度の土器づくり関連実技講座一覧

実施年度	種別	講座	対象者	目的	実施内容	手本とする土器
2021	在宅型	おうちで土器づくり	未就学児・小学生 その保護者	土器づくりの技術の習得 成形しやすい器形・器案文様の土器 を製作	輪埴みによる土器の成形 文様の施文 電気窯・野焼き（希望者のみ） 展示（希望者のみ）	有
2021	館内実施 募集型	土器づくり初級編	小学生以上で土器づくり未経験の人 （一人で土器をつくらなければならない）	土器づくりの技術の習得 成形しやすい器形・器案文様の土器 を製作してもらう	土器の観察 輪埴みによる土器の成形 文様の施文 電気窯による焼成 土器の製作方法・施文方法の観察	有
2021	館内実施 募集型	土器づくり上級編	輪埴みで土器を製作したことがある人	高度な土器づくりの技術の習得 器形や文様が複雑な土器を製作	輪埴みによる成形 文様の施文 電気窯による焼成（文様不良により野焼きが できなかったため） 展示（希望者のみ）	有
2022	在宅型	おうちで土器づくり	未就学児・小学生 その保護者	土器づくりに関した 輪埴みで土器をつくることを知って もらう	輪埴みによる土器の成形 文様の施文 電気窯による焼成	無
2022	館内実施 募集型	土器をつくらう	小学1年生～中学3年生 （小学1～3年生は保護者同伴必須）	土器づくりの技術の習得 成形しやすい器形・器案文様の土器 を製作してもらう	土器の観察 輪埴みによる土器の成形 文様の施文 電気窯による焼成	有
2022	館内実施 募集型	土器づくり	小学生以上 （小学生は保護者同伴必須）	土器成形・器案調整技術の習得	成形・器案調整の過程の観察 輪埴みによる土器の成形 器案調整 野焼き	有

導入に位置づけられる講座となっている。

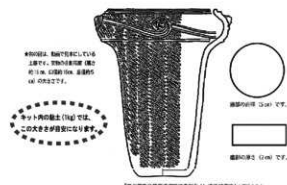
従来の講座では、職員が手本を見せたり、手助けしたりして実技指導していた。「おうちで土器づくり」では、その代わりに解説動画を作成し、職員が土器をつくりながら実況し、受講者はそれを視聴して作成を進められると考えた。

「おうちで土器づくり」は、小学生が主な受講者であろうと想定して準備を進めた。参加受付を2021年4月24日から6月27日までとした。

手本の土器の選定にはいくつか条件を設定した。

①受講者一人が使用する粘土量を「初級編」を踏襲して1kgとしたことから、器高が20cm程度、②略完形で形状の把握が容易、③成形のしやすい、くびれや膨らみの少ない器形、④文様が複雑でない。これらの条件に合うものとして、2021年度に企画展で展示予定であった法正尻遺跡（磐梯町・猪苗代町）の538号土坑出土の縄文土器を選定した。

製作時において、動画だけでは土器の形や文様がわかりにくいと考えた。そのため、体験キットの中



第2図 配布した資料（2021年度）

に土器の実測図を載せた資料を入れた。器壁を厚く作りすぎた等、粘土が不足する可能性を考え、図は実物の8割程の大きさのものとした。同資料には、底部の円盤の大きさや厚さの目安となる図をつける工夫もしている。

体験キットにはこの他に、子ども向けの説明資料、縄文原体、竹管の代わりに紙ストローを入れている。子ども向けの説明資料には、準備することやもの、製作時の注意点などを記載した。

動画は手持ちで撮影し、必要に応じて撮影の位置を変えながら行った。撮影時に台本はなく、状況に合わせて説明を加えている。また、撮影を止めず、編集時に不要な場面を削除してまとめることにしていた。

動画は全部で5本に編集した。内容や公開方法は表1のとおりである。視聴時間は合計で28分30秒になっている。これらの動画には、製作方法の説明の字幕を必要に応じて追加している。動画は受講者のみが視聴できる限定公開で配信した(表2)。

講座参加の流れは、①白河館での申し込み・粘土購入、②自宅等での体験、③自宅等で土器を乾かす、④土器を白河館に持ち込む、⑤焼成、⑥土器の引き渡し、となるようにした。焼成は電気窯と野焼きのどちらかで行うことにした。④の段階で受講者に確認し、希望者のみ野焼きでの焼成を行った。

(2) 2021年度に見えた課題

まず、製作時における課題が見られた。手本とした土器は口縁部に横位に連結する渦巻きが貼付文により表現されている。製作した土器の中には、その

表2 公開した動画の内容

公開年度	動画タイトル	視聴時間	主な内容
2021	土器づくりについて	4分27秒	手本となる土器の形や文様の説明
2021	土台と1段目の作り方	5分57秒	土台の円盤から、輪積み1段目までの製作
2021	2〜7段目の作り方	6分04秒	輪積み2〜7段目の製作
2021	8段目の作り方	4分37秒	8段目にあたる口縁部の製作
2021	文様の付け方	7分05秒	縄文・紐文・沈線の施文の仕方
2022	おうちでできる土器づくり	31分24秒	産地から口縁部の成形の方法 縄文・沈線の施文

貼り付けがうまくできておらず、乾燥中や焼成時に取れてしまうものがあった。受取段階で土器が乾燥しているように講座の流れを設定していたため、修正は難しかった。

館内で講座を行う場合は、前述のようにアドバイザーや手助けを行っていた。しかし、館外で参加する講座では同じ対応はできず、職員と受講者が同じ場にいらない講座ゆえの難しさを感じた。受講者の大半が小学生以下で、初めて土器づくりをする人も多い。そのため、動画の視聴だけではどのくらいまで粘土を貼り付けられのいか実感することが難しかったためと考えた。それを踏まえて、粘土紐の貼り付け方について、もう少し詳しく説明を加えることが必要だったと考えている。

また、未就学児など低年齢層の受講者が手本とは全く違う土器を製作している事例も見られた。これは「初級編」でも見られる事象である。手本の土器をつくるのが難しく、作りやすい大きさや形に製作したと考えられる。館内で実施する土器づくりでは、複数の手本を用意している。そのため、年齢に合わせて作りやすい形や大きさのものをも動かすことが可能だ。しかし、複数の手本を用意して動画を撮影する場合、それぞれの特徴に合わせて合わせた作り方を説



第3図 子ども向けの説明資料

明する必要がある。これは、動画の長時間化につながるため、現実的ではないと考える。

また、動画の撮影に関する課題もあった。撮影は動きながら、視点を変えて行った。そのため、手振れによる動画の不鮮明さや、手元の動きがうまく撮影できていないことがあった。このような点があると受講者が参考ができなくなってしまう。この点を改善した撮影を行う必要があると考えた。

3 2022年度

(1) 実施内容

2022年度は、未就学児や小学生などの低年齢層が、土器づくりに親しみや興味を持ってもらうことを目標に、講座の内容を大きく変更した。

まず手本とする土器を用意せず、自由に成形してもらうことにした。

その上で、前年度例から、粘土量を1kgから500gに減らして、より小型の土器の製作を目指してもらうこととした。

手本となる土器を設けなかった理由は、土器づくり全般の技術の習得を目標とするよりも、低年齢層が「つくる喜び」を通じて少しでも文化財へ関心をもってもらうことが重要だと考えたからである。その上で、土器づくりの基礎となる「輪積みによる成形」と「文様を入れる技術」を、習得できる講座内容とした。これにより、キットの内容を粘土・縄文原体・子ども向けの説明資料だけにするなど、変更をしている。

また、できるだけ多くの受講者を募るため、受付期間を2022年5月17日から2023年1月9日と従来の実技講座の募集期間に比べて大幅に延長した。これは子どもたちの長期休みに体験しやすいための配慮である。

実施内容が変わったため、動画は新たに撮影した。撮影は、手元の動きが写りやすいようにカメラの位置を固定して行っている。また、前年度の課題から、施文は縄文と沈線のみで行う内容に変更した。これは、乾燥中や焼成時に壊れやすい部分が生じないようにする対策となると考えたためである。

動画は、視聴しやすいように一本の動画にまとめることにした。その編集は、受講者が文字ではなく、実際の手の動きを見ていると想定して行っている。



第4図 2022年度の

受講者の作品例

をできるだけ短く、ゆっくり話すことに注意した。最後に、公開方法を誰でも視聴できるように変更した。多くの人に視聴してもらい、動画から講座に興味を持ってもらおうと考えたためである。

期間を長くしたこともあり、前年度より多い56名が受講し、当初に設定した目標を達成したといえる。

(2) 2022年度に見えた課題

2022年度版の「おうちで土器づくり」は、難易度を下げた結果、より多くの低年齢層の受講者が得られた。これは当館が館内で実施する「土器づくり初級編」や「土器をつくろう」といった、一歩踏み込んだ土器づくり関連講座への導入につながると期待できる。

当館の土器づくりに関する実技講座は、さらに中級編として位置づけられる「土師器づくり」、より難易度の高い複雑な器形や文様の土器の製作に挑戦する「土器づくり上級編」を設けている。このことにより様々な年齢層や関心に対して、対応できるように心がけてきたところであった。今回、動画を活用した在宅型の実技講座を導入したことで、小学生からさらに未就学児へと受講者の裾野を広げることができた。これは、未就学児やその家族が来館するきっかけにもなり、「学びのプロセス・サイクル」につながることが期待できる。

一方で、手本となる土器を「まねる」ことによる学びのプロセスは、全年齢層にとって重要である。したがって、「土器づくり初級編」など、実物の土器を観察しながら行う館内での実技講座は欠かすことができない。今後、「おうちで土器づくり」から「土器づくり初級編」などの館内講座へいかにしてつなげていくかが課題である。

また、これまでの動画では伝えきれていない内容

について、改善する必要がある。改善点の例としては、野焼きの様子などを動画で取り上げることで、土器づくり全般を紹介できるような構成にしたいと考えている。さらに未就学児などが動画を見ながら説明に聞き入ることができるよう工夫も、児童教育の観点から改善を考えたい。

4 まとめ

館内で行う実技講座の場合、一度に受講できる人数に限られる。その点、インターネット上の動画を活用した講座は、視聴可能な人ならだれでも体験できる利点がある。この利点から、この先感染症の流行が収束した場合でも実施できる講座だと考えている。その継続により、土器づくりや文化財に興味を持つ人を広げていくことにつなげたい。

【参考文献】

笠井崇吉・廣川紀子・和知千穂 2021 『新しい生活様式』での体験活動『福島県文化財センター白河館研究紀要第19号』福島県文化振興財団